

# 剥接法を改良した一接木方法

中内武五郎

まえがき

接木の方法として、一般的には切接、割接、腹接、袋接法がおこなわれているが、その他に剥接法がある。この方法は寒冷な地方の凍害防除策として「クリ」や、「モモ」などの大径木に高接をする場合に効果をあげている。しかしこの方法は難かしい操作を必要とするので、筆者はこの剥接法を改良して、さらに能率をあげることを考え、クリを材料にして実験したところ、操作が簡単で、よい成果を得ることができたので、この方法を改良剥接法と名づけその成績をここに報告する。なお本実験に種々指導いただいた、元林野庁企画官、小野陽太郎氏に深甚な謝意を表す。

## 材 料 と 方 法

### 穂 木

シナグリ (*C. mollissima*) ×ニホングリ (*C. crenata*) の雑種 F<sub>1</sub> から (接木して4年目の木) 前年伸長した枝を3月2日から3月10日の間に採取し、穂木の切口は乾燥と病菌の侵入を防ぐため「接ろう」を塗布し、ポリエチレンの袋に入れ、鋸屑に包んで低温室 (-5℃±1℃) に接木の時期まで貯蔵した。

### 台 木

*C. mollissima* の実生2年生を低接に、また *C. crenata* (品種不明) の樹令17年のものを高接に使用した。

### 方 法

従来の剥接法は穂木の2方を削り、台木は小刃で2条の切目を縦に入れたが、この改良剥接法は穂木の3方を削り、台木の切目は1条でよく、また穂木の挿入は従来の剥接法では、切目の幅と、穂木の太さを厳密に合せなければならなかったが、改良剥接法はその必要なく、片側の皮部をかるく剥いで、残った片側の形成層と、穂木の形成層が合うように挿入すればよい。この改良剥接法操作の順序は付記の写真で説明した。

### 比 較

接木を低接と高接にわけ、低接では台木を掘りあげておこなう揚接と、前年から植えたものに接ぐ据接の2方法によった。また揚接、据接とも台木は地際からやく10cmのところを切断して、切接、割接、腹接、袋接のほか改良剥接法の5方法をおこなった。高接は2~6年の古い枝に、切接、腹接、改良剥接法の3方法を実施した。これらの接木は5月2日から5月10日までの間に、美唄市、芦別市、栗山町で実施した。この結果は活着が確認された8月中旬に調べ比較した。

結 果

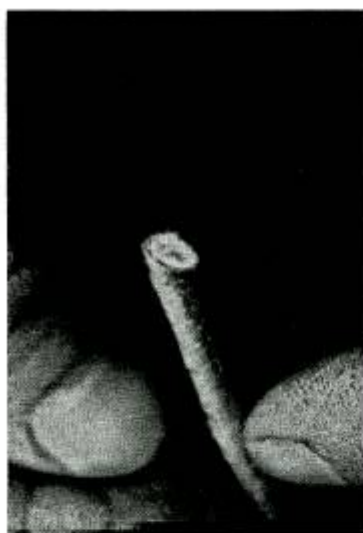


写真 ①  
粗木は約 5 cm の長さに切り、1 芽のものを使う。



写真 ②  
①で切った粗の木表を約 2 cm 削る。



写真 ③  
②の裏を約 0.5 cm 切返をする。

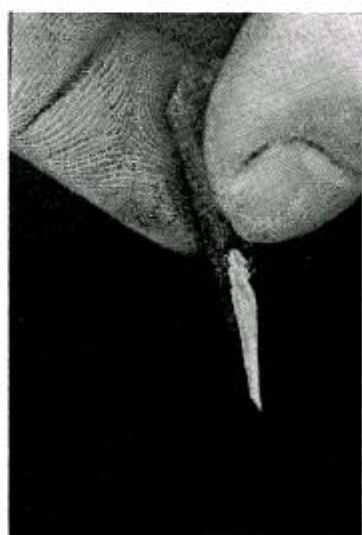


写真 ④  
③③で削っていない両側のうち片側の形成層を木質部まで達しないように削る。



写真 ①  
台木を切断して、小刃を縦にし材部に向かって③で削った長さと同じ長さに形成層まで切込を入れ④で削った長さだけ剥改する



写真 ②  
③～④までの操作で削づくりしたものを①で切込みしたところに挿入し皮をかぶせる。



写真 ③  
挿入を終った状況



写真 ④  
挿入した穂がうごかないようにゴムひもで結ぶ。

#### 接木法別による活着成績

第1表に示したように揚接における平均活着率の73.8%に対し改良剥接法は86%の高率をしめし、もっとも低率の割接にくらべるとやく20%よい成績である。さらに据接による低接でも平均77%にくらべ、改良剥接法は88%とやく10%も活着がよかった。また一番悪い割接に比較するとやく22%の差がみられた。高接による改良剥接法は87%で、平均の80.1%よりもやく7%活着が高かった。

#### 改良剥接法による台木の太さ別活着成績

台木の太さによる活着の差はきわめて少ないことが第2表からあきらかである。これは平均の83.3%に対してもっともよい0.5～1.0cmの太さでは89%とよく、わるかったのは4.1～5.0cmで77%で、平均にくらべやく6%の少

ない差であった

第1表 接木方法別の活着成績

処 理 法 接木方法\	揚 接			据 接			高 接		
	接木本数	活着本数	活着率	接木本数	活着本数	活着率	接木本数	活着本数	活着率
改良剥接法	36	31	86	34	30	88	47	41	87
切 接 法	42	30	71	30	23	77	32	24	75
割 接 法	27	18	67	30	20	77	—	—	—
腹 接 法	29	20	69	27	21	78	27	20	74
計	134	99	73.9	121	94	77.7	106	85	80.2

第2表 改良剥接法による台木の太さ別活着成績

台木の太さ\本数	接木本数	活着本数	活着率%
0.5~1.0cm	70	62	89
1.1~2.0	37	31	84
2.1~3.0	37	30	81
3.1~4.0	29	24	83
4.1~5.0	22	17	77
5.1~7.0	31	26	81
7.1~10.0	32	25	78
計	258	215	83.3

穂木の部位と接木方法による活着成績

穂木を3等分して先端を上位、中間を中位、また幹に近い部分を下位とし、それぞれの部位に接木したところ改良剥接法は第3表に示すように上、中、下位を平均しても80%の高率をしめした。各部位別でもっともよかった中位の平均は80%、下位は76%、ついで上位の69%であったが、上位については平均の75.2%より6%低かった。

第3表 穂木の部位と接木方法による活着成績

部 位 接木方法\	下 位			中 位			上 位			計		
	接木本数	活着本数	活着率%	接木本数	活着本数	活着率%	接木本数	活着本数	活着率%	接木本数	活着本数	活着率%
改良剥接法	31	26	83.8	38	32	84.2	37	27	72.9	106	85	80.1
切 接 法	29	23	79.3	34	28	82.3	28	21	75.0	91	72	79.1
割 接 法	31	21	67.7	31	23	74.1	26	17	65.3	88	61	69.3
腹 接 法	25	18	72.0	32	25	78.1	29	18	72.4	86	61	70.9
計	116	88	75.8	135	108	80.0	120	83	69.1	371	279	75.2

接木方法別による工期表

1人1日あたりの各接木方法別による工期は第4表にしめしたが、これを指数でみると改良剥接の100に対し揚接の袋接法で147、据接、低接の同じ袋接法で127となったが、その他の方法は改良剥接にくらべ低い工期である。この工期は接木を覚えて2年目の人のもので操作上に個人差のあることを付記しておく。

第4表 接木方法別工期表  
改良剥接法を100としたときと1人1日当りの工期

処理法 接木方法	揚 接		据 接			
	本 数	指 数	低 接		高 接	
			本 数	指 数	本 数	指 数
改良剥接法	202	100	248	100	126	100
袋 接 法	298	147	314	127	—	—
切 接 法	151	75	156	63	118	92
割 接 法	164	81	176	71	114	91
腹 接 法	135	67	138	56	—	—

む す び

クリのように接木が容易なものでは、あまりおこなわれなかった剥接法に、少しの改良を加えることにより、かなりの成果をあげることができた。この実験からおよそつぎのことがいえる。

1. 改良剥接法は揚接、据接でもよい成績をあげることができ、従来一般的におこなわれている切接、割接、腹接よりも優れている。
2. 改良剥接法は台木の太さの選択が、それほど重要でなく、むしろ穂の部位に多少の問題が残るだけである。
3. 接木の工期では袋接がもっとも高率であるが、大径木に接きできないが、この点改良剥接は大径木にも接木ができて応用性が大きく、初心者でも量的に多く接げる。



写真 ②  
改良剥接法を高接したクリの癒合した横断面



写真 ③  
改良剥接法で高接した2年目の状況



写真 ⑪  
改良剥接法で低接して癒合した縦断面



写真 ⑫  
改良剥接法で1本の台木に2本接木し癒合した縦断面

4. 穂の部位では先端ほど未熟であるからさけた方がよい。

以上のほかいろいろの問題もあるが、要約して改良剥接法はもっとも実用的な方法と思われる。なおこの方法の癒合状況は写真⑨～⑫で解説した。最後にこの実験は5年間にわたって部分的におこなったデーターをとりまとめたことと、材料の不揃いなどもあって、決定的なことはいえないが、さらに検討を重ね、生長の良否、功程の向上と技術的なことを究明していきたい。

#### 文 献

- 倉田益二郎 (1961)・特用樹木の栽培・朝倉書店, 1-276  
小野陽太郎 (1953)・図説接木繁殖法・朝倉書店, 1-199